

幸福度日本一の福井発見シリーズ

私のふくい探訪

幸福な 福井における 希望の追求

南国・熊本出身の私にとつて、北国・福井は、これまであまり身近な地域ではなかった。郷土の偉人・横井小楠と松平春嶽公とのつながりから、何となく親近感を持っていた程度である。しかし、東京大学社会科学研究所と福井県との共同研究である希望学・福井調査の始動によって、状況が一変した。2008年秋以降、希望学プロジェクトの仲間たちと、頻繁に福井県各地を訪れ、福井の希望について考えることになったのである。

希望学は、希望と幸福は異なるものと考えている。幸福が現状維持を志向するのに対して、希望は未来を志向する。そして希望こそが社会の変化を可能にする。福井の希望をつぶさに観察した結果、私たちは近年の福井が、幸福への安住から、希望の追求へと軸足を移しつつあることに気づいた。この点を、福井を代表する繊維メーカー・セーレンの事例で考えてみよう。



東京大学社会科学研究所教授

なかむら なおふみ
中村 尚史

1966年熊本県生まれ。1994年九州大学大学院修了。東京大学助手、埼玉大学助教授、東京大学准教授などを経て2010年から現職。博士(文学)。専門は経営史・地域経済史。主著『日本鉄道業の形成』、『地方からの産業革命』。

羽二重の精練から出発した同社は、戦前期から1970年代まで、安定的な委託加工によって成長してきた。しかし幸福な時代は、永遠には続かない。1980年代の模索期を経て、1990年代のセーレンは、川田達男社長(現会長)のもとで徹底的な企業革新を行う。その結果、2000年代には、企画・生産・販売を一貫して行う総合繊維メーカーという新しいビジネス・モデルを創造し

た。現在、セーレンは世界市場を相手に、積極的なグローバル展開を行っている。そして、一連の経営改革の過程で掲げ続けた旗印が、「夢」希望であった。

現状を一气呵成に打開し、全く新しいビジネス・モデルを構築する。こうした果敢な企業行動は、セーレンに限ったものではない。実は明治期の福井における羽二重生産の導入もまた、革新的な企業行動の一例であった。そして現在も、多くの人や企業が、希望を掲げ、福井からダイレクトに、世界へ飛び出している。幸福な福井における希望の追求。現状に安住しない福井の姿勢に、地方創生の鍵が隠されているのかも知れない。

エネルギー

電力自由化が進む中、原発への安全投資がおろそかになってはいけません。原子力への信頼性向上のためにも、電力事業者はハード・ソフト両面で、自主的・継続的に安全性向上対策に取り組むことが重要です。

福井県経済団体連合会 会長 **川田 建男**

福井県環境・エネルギー懇話会

〒918-8004 福井市西木田 2-8-1
福井商工会議所ビル 6F

▶バックナンバーはコチラから

福井県環境・エネルギー懇話会

次回掲載は

齊藤 治和氏 8月20日(木)掲載予定

※掲載日は前後する場合がございます。
ご了承ください。